

オモロと琉歌における「大和」のイメージ

ウルバノヴァー, ヤナ / URBANOVÁ, Jana

(出版者 / Publisher)

法政大学国際日本学研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES / 国際日本学

(巻 / Volume)

11

(開始ページ / Start Page)

305

(終了ページ / End Page)

333

(発行年 / Year)

2014-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00022476>

オモロと琉歌における「大和」のイメージ

ヤナ・ウルバノヴァー

1. はじめに

『おもろさうし』は、1531年から1623年（第1巻が1531年、第2巻が1613年、第3～22巻が1623年）にわたり、琉球王国の首里王府によって編纂された沖縄最古の歌謡集で、1554首収められている。また、琉歌の創作年次は未詳であるが、「琉歌」という単語を記録した最も古い文献は、おもろ語辞書の『混効験集』（1711年）で、それ以前の1683年にも、琉歌の形式の歌が存在していた記録が残っているとされる（池宮1992、嘉手苅2003）。琉歌は遅くとも17世紀末には確実に存在していたと言えよう。また、オモロと琉歌との関係についても、様々な研究者が論じているが、要するに、琉歌はオモロという叙事的な神歌を母体としながら、琉球文化の独特のものとして自立したとする伊波普猷、仲原善忠、比嘉春潮、金城朝永、外間守善などの説（比嘉1975）があり、琉歌とオモロが深い関係にあることは間違いないだろう。

こうした時代的にも地理的にも互いにあまり離れていないオモロや琉歌の中に、「^{のぼ}上り／^{のぼ}上て」という表現が数多く見られるが、これは物理的に高い場所へ移動するという当然の意味以外に、身分の高い人物（王様・按司等）や神々がいらっしゃる所へ参るという意味を表す場合もある。「上り／上て」全用例中、「大和」へ行くことを歌ったものも見られる（オモロで約11%、琉歌で1.4%を占める）。歴史的・文化的観点からも、重要な場所へ行く意味を含んだ「上り／上て」が、「大和」と連結しているところから、大和と国際関係を維持していた当時の琉球王国の人々にとって「大和」が重要な位置にある場所として認識され、高く評価されていたのではないかと、推定できるだろう。けれども、

オモロと琉歌における「大和」のイメージは、高く評価されている存在のみとして捉えているのか。それとも違うイメージも有するものなのであろうか。

本稿では、オモロや琉歌の中で、当時の「大和」はどのようなイメージで捉えられ描かれているのかについて、以下に考察を進めたい。「大和」という表現を含んだすべての琉歌とオモロを対象に調査し、両歌における「大和」のイメージが共に同じものであるのか、否かという点を、本稿で明らかにしたい。

また、「大和」のイメージという問題を扱う際、当時の歴史的・政治的な背景も関わることもあり、広い範囲では歴史的・社会的な状況もこの問題と一緒に考察する必要があると考えられる。しかし、ここでは字数制限という理由から、歴史的・政治的な背景の詳しい考察は将来の研究課題としたい。よって、本稿では、発想論や表現論という観点から「大和」はオモロと琉歌という琉球文学の中でどのようにイメージされ、捉えられていたのかという点に限って考察することにした。それは先行研究（嘉味田 1968、1977）においても、琉球文学における様々な表現の発想源となる精神等について、すでに考察が進められているものの、オモロや琉歌における「大和」という表現のあり方については、いまだ指摘がされていないからである。そこで本稿では、「大和」という表現がオモロと琉歌の中で有する文学的な発想（イメージ）を明かにし、この表現に関するオモロと琉歌の共通点や相違点について報告し、分析したい。

なお、本論で用いたテキストは、外間守善校注『おもろさうし上・下』（岩波文庫・2000年）と、島袋盛敏、翁長俊郎『標音評釈琉歌全集』（武蔵野書院・5版発行1995年、以下『琉歌全集』と略す）である。またそれに加えて、清水彰『琉歌大成』（沖縄タイムス社・1994年）も適宜参照した。

2. オモロにおける「大和」のイメージ

「大和」という語は、仲原善忠・外間守善『おもろさうし辞典・総索引（第二版）』（角川書店・1978年）に、「広く日本本土を意味する」ものと記されている。『おもろさうし』に、大和および、それと関連する人物または事物を歌ったオモロは、全1554首中21首見られる。ただし、それらの中で日本本土を意味する語は「大和」だけでなく、別に二つの違う語も見られる。一つは、「大和」

が歌われる同じオモロの7首に見られる「やしる（山城）」で、同辞典によると、「京都の山城をいう。『る』は『ろ』のおもろ表記」と解説されており、「山城」は「大和」の対語である。また、別の1首のオモロには、「にほんうち（日本内）」という表現も見られ、同辞典によると、「日本中」という意味を持つ語である。結局、『おもろさうし』の中には、「大和」が20首、「山城」は「大和」と対語関係をなす7首に見られ、そして「日本内」は1首のみに見られる。以上から、日本本土を具体的に歌ったオモロは、計21首あることになる。

それでは、『おもろさうし』に見られる「大和」は、表現上どのようなイメージで歌われているのかという点について、以下報告する。

「大和・山城・日本内」を歌った計21首のオモロを、その内容によって整理・分類すると、次の四つのグループに分けることができる。

- ①祝い（賛美）の歌 → 12首で57.1%（巻7 - 377、巻8 - 457、巻11 - 582、606、620、巻14 - 988、1018、巻15 - 1082、巻16 - 1144、巻17 - 1185、巻21 - 1426、1436）

上の①祝い（賛美）の歌はさらに二つのグループに分けることができる。

- ①A 大和へ友好的な傾向を表す歌 → 6首（巻8 - 457、巻11 - 582、620、巻14 - 988、巻15 - 1082、巻21 - 1436）

- ①B 大和へ競争心を表す歌 → 6首（巻7 - 377、巻11 - 606、巻14 - 1018、巻16 - 1144、巻17 - 1185、巻21 - 1426）

- ②反感の歌 → 5首で23.8%（巻3 - 93、96、97、巻14 - 1027、巻20 - 1364）

- ③「上て」の歌 → 3首で14.3%（巻10 - 538、巻11 - 637、巻21 - 1497）

- ④祈りの歌 → 1首で4.8%（巻13 - 783）

上のうち、まず計3首の例のある③「上て」と歌われるオモロから取り上げる。これらの3首を観察すると、次の二つのことがうかがえる。第一に、3首のオモロは共に大和旅に買い物をしに行くことを描写していることである。特に、

巻10 - 538のオモロを見てみると、当時に貿易や造船術が発達していた様子うかがえる。伊波普猷（1975）もこの歌を取り上げているテキストの中で造船術を予想させることについて述べている。また、第二にうかがえることは、「大和」と呼応している動詞として「上る」動詞が使われていることである。この場面で歌われる「上る」動詞には二つのニュアンスがあると考えられるが、まずその一つ目は、「大和」や「山城」を目的地として、「上て」と歌うオモロは、「地方から都へ行く」という意識の現れであるため、これらは沖縄本島の琉球王国が地方であると認識した上での表現と言える。地方は文化的には、より低い所であり、都である「大和」や「山城」を文化的に高い所と認識した結果の表現である。これら3首のオモロから、当時の琉球王国と大和の関係のあり方の一端が知られるが、要するに社会的・文化的観点から、琉球王国は「下」、大和は「上」の位置にあったことがうかがえる。特に、薩摩藩の琉球への侵入（1609年）以降、両国の上下関係は明確なものとなった。また、「上る」動詞の二つ目のニュアンスとして考えられるのは、「地方から都へ行く」のではなく、ただ単に「北へ上る」、つまり「北上」することである。南島である琉球へ行く時に、「南下」する概念があるのに対し、逆に琉球から北方にある「大和」へ行く時に「北上」する概念があったのかもしれない。そうすると、「上る」動詞は、上下関係に関する先の一つ目のニュアンスと異なり、ただ単に北上するという二つ目のニュアンスも考えられ、かなりニュートラルな意味となる。筆者は、両方のニュアンスを認めつつも、一つ目のニュアンスを主張したい。なぜなら、3首のオモロの中では「大和」が貿易対象として歌われているため、貿易相手を友好的に思い、高く評価したと考えるほうが、無理がないのではないかと考えられるからである。さらに、「上て」と歌われるオモロは、残りの三つのグループのオモロと比べて、「大和」に対する批判や賛美の発言を含まない点で異なる。すなわち、③は無難な内容のオモロであるため、これら3首に見られる「上て」のオモロはニュートラルもしくはプラス（友好的な）イメージとして捉えられよう。

「大和」を歌ったオモロの中で最も例の多いのは、①祝い（賛美）のオモロである。賛美される対象は一体何かといえば、琉球の権力者である国王や按司、それに神女、さらにグスクと呼ばれる城や神祭りなどの神事である。そして、

こうしたオモロの中には、次の二つの傾向も見られる。

その一つ目は、大和に対する友好関係を表現している点である。このような雰囲気醸し出すオモロの例には、大和から来たり大和へ向かったりする船を祝福するもの、また大和の人たちに琉球王国で行われた祭りを見せたいと歌うものが見られる。つまり、そうしたオモロを見ている限り、大和と琉球王国の関係は良好な関係のように見える。さらに、これらのオモロも1首ずつ詳しく見ると、殆どの場合は貿易や造船を予想させる場面が浮かび上がり、貿易相手である琉球王国と大和との関係は友好的な関係にあるように歌われている。こうしたオモロは、①祝いのオモロの①Aの6首に見られ、祝いのオモロ全体の半数を占めている。

二つ目は、①祝いのオモロの①Bの6首（同グループの同じ半数）であるが、これらは①Aとは異なる傾向が見られる。これらのオモロは、琉球の国王、按司、神女や地名を賛美して、その評判が大和にまでも鳴り轟くことを歌ったり、大和の有名な人物や地名にたとえたりもしている。こうした歌い方は、大和を誉め称え、大和への憧れを表しているとも解釈できる。しかし筆者は、琉球の名所や人物を大和にたとえることを通して、表現の上で大和の勝れたところを賞美称賛しているというだけでなく、琉球を大和と重ね合わせることで、大和と同様に非常に優れた国家であるという、誇り高さ意識やある種の競争心（張り合う気持ち）を示しているように感じられる。なぜかといえば、続いて論じる3.と4.で見る琉歌の例からも明らかなように、大和への憧れを表す歌（琉歌のBグループ）は、ただ単に「大和」のことを賛美し、その中で「沖繩」（琉球）への賛美をわざわざ言及する必要はないからである。逆に、「沖繩」を賛美する時に、「大和」との比較が目立ち、上下関係にある「沖繩」は「大和」と同様に勝れ、その評判は「大和」まで鳴り轟け、「大和」の権力者にも知ってほしい、と歌われており、張り合う気持ちが明瞭に表現されていると言える。

①とは逆に、②反感の歌は明らかに日本と対立する気持ちを歌ったオモロである。②は計5首あり、大和を臣下にすること、大和の兵士をこらしめることや大和の軍勢を呪詛し退けることなどが歌われ、大和や大和の軍に対する敵意の意識が明確に表現されている。薩摩藩の琉球への侵入（1609年）以降、両国の上下関係は明確なものとなり、琉球王国は正式に王府領と認められた

ものの、実際には大和（薩摩）の臣下のように扱われた状況は、矛盾を含んだ複雑な両国の関係を生み出した。このような複雑な関係は、②反感の歌から最も明確に読み取れる。

なお、敵意とは正反対の、好意の気持ちをはっきりと歌ったオモロも見られるが、それは最も数少ない④の祈り歌の1首である。このオモロは大和から来た船頭が無事に帰国することを、神に祈っている様子を歌っている。

以上をまとめてみると、大和を詠み込んだ21首のオモロの中、主に貿易相手として描かれている大和に対する友好的な感情を歌うオモロは計10首あり、47.6%を占める。それは③の「上て」のオモロ3首、①祝いの歌の中の①A大和へ友好的な傾向を表す歌6首や④祈りの歌の1首である。それとは逆に、大和に対する競争心（張り合う気持ち）および反感までの気持ちを歌うオモロは計11首あり、52.4%を占める。これは大和に対して好意的な気持ちを表すオモロと比べて、ほぼ同数であることが明らかになった。それらのオモロは、②反感を表す5首と、①祝いの歌の中の①B競争心の歌6首で、計11首になる。

なお、「大和」の対語表現である「山城」という語を用いたオモロは、反感の歌4首および「上て」の歌3首にのみ見られ、日本への対抗心か、貿易相手としての日本との関係を表す。そして、「日本内」という表現も1首のオモロ（祝いの歌）に見られるが、それは日本に対する競争の気持ちを歌っている。

3. 琉歌における「大和」のイメージ

大和を取り上げた琉歌は、計19首ある（重複歌を除く）。その内訳は、『琉歌全集』に「大和」の例が11首、「日の本（ひのもと）」が1首見られる。また、『琉歌大成』の琉歌には「大和」を歌う例が7首見られる。なお、オモロに例のある「山城」や「日本内」は琉歌には一切見られない。

それでは、琉歌の例をオモロと同様に以下、その内容面から整理・分類してみると次のようになる。

●祝いの歌 → 8首で42.1%

●祈りの歌（その中、「お上り」の歌1首含む） → 4首で21%

- 切ない歌 → 3 首で 15.8%
- 喜びの歌 → 2 首で 10.5%
- 滑稽な歌 → 1 首で 5.3%
- 反感の歌 → 1 首で 5.3%

この結果を見ると琉歌はオモロと比較して、より多くのテーマがあり、内容的に豊かで複雑なことがわかる。そこで、上記の分類法を一層シンプルな分類の仕方に改めると、次のようにまとめられる。

- A 沖縄を賛美する歌 → 4 首で 21.1% (『琉歌全集』の 2636 番歌、『琉歌大成』の 24・2178・4466 番歌)
- B 大和を賛美する歌 → 4 首で 21.1% (『琉歌全集』の 1651・1709・2756 番歌、『琉歌大成』の 4467 番歌)
- C 大和に対する反感の歌 → 1 首で 5.2% (『琉歌全集』の 1524 番歌)
- D 個人の感情、若しくは航海に関する歌 (大和に対する感情は歌わない) → 10 首で 52.6% (『琉歌全集』の 552・876・1183・1200・1637・1675・2104 番歌、『琉歌大成』の 1454・1630・2595 番歌)

上の分類結果から、大和に対する反感の気持ちを歌った琉歌は C の 1 首のみである。その数は、大和へ反感を表す 5 首と、大和へ競争の気持ちを表す 6 首の計 11 首あるオモロと比べて、琉歌には 1 首しかなく、極めて少ない。また、琉歌には、大和の語を詠み込む中に、A 沖縄を賛美している歌数と、B 大和を賛美する歌数は共に 4 首あることがわかる。したがって、琉歌の場合は沖縄と大和をどちらも勝れているように歌っており、一つの国だけを賛美するという際立った偏りが見られない。加えて、沖縄や大和に対する気持ちを表現せず、愛する妻や夫などに対する個人的な感情、または、沖縄の人々にとって関心の高い航海の安全に対して感謝や喜びの気持ちを表した歌は D の 10 首と多く、その数が A や B の賛美の歌数を大きく上回っている。航海の要素が歌われている点は琉歌のみならず、琉歌とオモロの共通点として挙げられ、航海というものが当時の沖縄の人々にとっていかに重要なものであったかが両歌からもうかがえる。しかし、航海の描写以外に D の琉歌のみに見られる個

人感情の描写という点は、オモロとは非常に異なる点であり、琉歌の特徴の一つであると言えよう。

なお、「日の本」は琉歌に見える唯一の表現であるが、その歌は完全に沖縄のことを称賛しつつ、「日の本」にまでも、その評判が届くようにと願っているのである。そして琉歌の「日の本」と、オモロの「日本内」という表現を含んだ歌は、もっぱら沖縄を賛美し、大和に対する競争の気持ちを表している点で、共通している。

4. 「大和」のイメージをオモロと琉歌で比較する

ここでは、これまでの調査結果を踏まえ、オモロと琉歌から伝わる「大和」のイメージを比較する。

最初に、沖縄を賛美するオモロと琉歌をそれぞれ1首ずつ紹介する。オモロの場合は、沖縄を賛美するものは、すべて①祝い（賛美）の歌に属している。まず、そのオモロを1首示す。

こいしのがさしふとのばらが節

〔大意〕

一 かさすちやは
 だりじゆ ^{とよ}鳴響め
 ^{みづ}見れば ^{みづ}水 ^{まわ}廻て
 又 ^{まもん}真物ちやは
 又 ^{はま}なごの浜に
 又 なごのひちやに
 又 大和ぎやめ
 だりじよ ^{とよ}鳴響め

かさす若按司、立派な若按司は、げにこそ鳴り轟け。穏やかななごの浜、なごの直地に、げにこそ鳴り轟け。大和までも、げにこそ鳴り轟け。若按司を見ると、水走のような美しい顔である。

(巻11・606)

このオモロは、「かさす」という沖縄の権力者（久米島の按司）を賛美する歌であるが、その評判は大和までも鳴り轟くようにと祈る場面が歌われる。「沖縄の評判は大和までも届くように」という祈願は、オモロだけではなく、琉歌にも見られ、共通している。しかしオモロの場合は、沖縄の勝れた人物や

ところをいつも大和まで鳴り轟かせ、大和と同様に勝れていると大和に喩えているのに対し、琉歌はそれだけの態度に止まることなく、中には「沖縄は大和より勝れている」と表現しているものもある。その琉歌を1首示す。

(歌の表記)

大和あんどわたが
色香よりまさて
島のめやらべの
しなりきよらさ

(歌の読み方)

ヤマトウアングワタガ
イルカユイマサティ
シマヌミヤラビヌ
シナリチュラサ

〈意味〉日本の姉さん達の色香よりも、島の女の子の方がぴったり合ってき
れいだよ。

(『琉歌大成』・4466 番歌)

琉歌には沖縄を誉める歌数が計4首あり、決して少なくはないだろう。中には、上記のように沖縄のことを大和よりも勝れていると賛美する歌もあって、大和に対する強い競争心とも言えるべき気持ちの現れたものも見られる。ただ、その一方で沖縄を賛美する歌だけでなく、大和自体を賛美する歌数も同様に4首ある。オモロと琉歌の共通点としては、賞美される大和に沖縄を重ね合わせる点が指摘できる。ところが、大和のみを賛美する琉歌が見られるのに対して、そうしたオモロは一切見られない。オモロの場合には、沖縄は大和と対抗・競争するものという意識が強かったことがうかがえる。琉歌の場合は、沖縄の賛美と大和の賛美がそれぞれ個別になされている点でオモロとは異なる。このような特徴を、以下のオモロと琉歌で示すことができる。

あかのこがよくもまたもが節

一 勝連わ 何にぎや 譬ゑる
やまと 大和の かまくら 鎌倉に 譬ゑる
又 肝高わ 何にぎや

〔大意〕

勝連は、肝高は、あまりに勝れていて何にか譬えようか。それこそ、大和の鎌倉に譬えるのだ。

(巻16・1144)

続いては、琉歌の例を挙げる。

(歌の表記)

名に立ちゆる大和

お上りや下り

おかれよしめしやいる

お願しやべら

(歌の読み方)

ナニタチュルヤマトウ

ウヌブリヤクダリ

ウカリユシミシエル

ウニゲシャビラ

〈意味〉評判の高い大和にいらっしゃるときは、お上りもお下りもめでたく無事にお努めをおすまなさるようお願い致します。

(『琉歌全集』・1709 番歌・小祿按司朝恒)

上に示したオモロは、沖縄の有名なグスク（城）の勝連が賛美されているのと同時に、勝連が大和の鎌倉にたとえられている。こうした歌い方は、大和に対する競争の気持ちを表していると読み取ることができよう。また、上の琉歌は大和を賛美しているが、沖縄には一切言及せず、単に大和を賛美するだけであるから、大和に対する対抗意識は薄く、ほとんど感じられない。ただ、沖縄を賛美する琉歌の中には、大和よりも勝れている沖縄を歌ったものもあるため、大和に対する競争の気持ちが琉歌に一切ないとは言えない。しかし、琉歌には大和を個別に誉めている例が存在するため、オモロよりも琉歌のほうが大和を寛大な気持ちで認めていると考えられる。

大和に対する琉歌の寛大さは、C「反感の歌」を見ても同様に理解できる。大和のことを歌ったオモロの中には、②「反感の歌」が計5首もあり、23.8%というかなり高い割合を示しているのに対し、同様の分類を行った琉歌の中で、反感の琉歌は1首(5.3%)しか見られない。以下に、反感のオモロと琉歌を1例ずつ挙げる(琉歌は上述の1首のみ)。

きせのしが節

一 兼城かねぐすくのろの
まふ 守りよわる弟勝おとまさり

〔大意〕

兼城ののろ神女が、国かねののろ神女が守り給う勝れた弟者よ、恐れ多

やぐめさ
やまといくさ 大和軍 寄せらや
又 国かねてののろの

いことだ。大和軍が寄せたならば、
弟者が退けてくれることであろう。
(巻 20・1364)

(歌の表記)
沖縄秋山や
紅に染めて
大和吉村の
お茶の遊び

(歌の読み方)
ウチナアチャマヤ
クリナイニスミティ
ヤマトウユシムラス
ウチャヌアスイビ

〈意味〉沖縄は秋の山が紅葉して真っ赤になっているように、血に染まって苦しんでいるが、大和人の吉村という人はお茶の遊びをして楽しんでいる。

(『琉歌全集』・1524 番歌)

オモロの反感の歌と琉歌の反感の歌は、その用例数という点だけで差がある訳ではない。内容の点からも相違がある。反感のオモロでは、主に大和の軍や大和そのものに対して強い反発を表現している。それに対して、反感の琉歌の場合は、大和そのものより大和の特定の一人の人間に対して抗議し訴えるものである。勿論、上の琉歌で、風刺の対象となっている吉村という人物は大和の代表者として捉えてもおかしくないのも、これも大和そのものに対する不満が歌われている場面と見なすこともできよう。

オモロには大和に対する反感および競争心という気持ちが読み取れる歌が過半数を占めている 11 首あるのに対し、琉歌には反感の歌が僅か 1 首しかない。琉歌の場合、沖縄や大和を誉め称える歌がそれぞれ 4 首ずつ存在する。このオモロと琉歌の異なる歌い方には、以下の二つの理由があったと考えられる。

一つ目の理由は、両歌の作成時代の差であると考えられる。「大和」を取り上げたオモロは全て巻 3 以降の巻に含まれていることがこの調査で分かった。巻 3～22 が編纂された 1623 年という年は、1609 年に起こった薩摩藩の琉球侵入から十数年が経った時代であり、「大和」である薩摩藩の支配の影響に伴っ

た複雑な感情が最も強かった時代であっただろう。そのため、オモロにもその反感や競争心が強く表れたと言える。それに対し、琉歌はおそらく18世紀初め、要するにオモロより1世紀ぐらい経過した時代に盛んに作られるようになったので、その時代にはすでに大和に対する反感の気持ちが薄まっていたと推察される。したがって、オモロと違い、琉歌には反感の歌が1首のみという結果になったのであろう。

また、オモロと琉歌における「大和」の異なるイメージの二つ目の理由としては、両歌のジャンルの違いという点があると考えられる。オモロは基本的にフォーマルな儀式的場で歌われ、群れの発想を表しながら呪術機能も果たしていた叙事歌であるのに対し、琉歌はインフォーマルな民間の個人の間で歌われ、個人の発想を表現している抒情歌であるため、こうした違いが生まれたのであろう。

最後に、琉歌とオモロの上述のジャンルの差という特徴について、以下の用例を取り上げながらも少し詳しく述べたいと思う。

琉歌には、個人の感情を題材にした歌が数多く含まれており、大和を歌った琉歌の中にも（航海の描写も含め）感情をストレートに表現した歌が10首あり、52.6%を占めている。さらに、祈りや祝いの歌の中でも相手に対する個人の期待、喜びなどが歌われている。一方、オモロには個人の感情に関する例はほとんど見られず、国王・神女に対する敬意や賛美のみが見られる。これは、神祭りの儀式的場における歌であることから当然の帰結と言えよう。こうしたオモロと琉歌の違いは次の例からも知られる。

きみがなし節

一 源河成^{ぎんかな}り思^{おも}ひや

せち玉^{たま}ぐすく

大和^{やまと}の鬼^{おに} かに ある

又 意地^{いぢへき}気成^なり思^{おも}ひや

〔大意〕

源河成り思ひ様は、勝れて活気のある

成り思ひ様は、霊力豊かな美しいぐす

くを造って榮えている。大和の勝れた

人のようにぞ、勝れているのだ。

(巻17・1185)

源河成り思ひは名護市源河^{げんか}の神女の名であり、このオモロは、その神女を

賛美して、お祈りするものである。沖縄の人物が賛美されているものの、大和との比較を必ず歌うのがオモロの特徴である。ここで注目したい点は、このオモロは個人の感情に一切触れず、神女の賛美や敬意のみを表す。これは儀礼という場における歌い方であろう。

一方、それに対し琉歌には個人的な感情を歌ったものが多い。以下、琉歌の例を挙げ、その中で個人の感情を前者のオモロと対照したい。

(歌の表記)

今帰仁の城

にやへ高さあれば

里前まゐる大和

見ゆらやすが

(歌の読み方)

ナチジンヌグスイク

ニヤフェタカサアリバ

サトウメメルヤマトウ

ミユラヤスイガ

〈意味〉今帰仁城がもっと高かったら、背の君のいらっしゃる大和も見えるであろうに、見えるのは海ばかり惜しいことだ。

(『琉歌全集』・876 番歌)

これは妻による愛しい夫に対する気持ちを歌う場面であり、ひたすら個人の感情を歌う琉歌である。

オモロも琉歌も両方ともに大和を歌っているが、オモロの場合は神女に敬意を払うために神女を大和の勝れた人物に喩えているのに対し、琉歌のほうは大和のことを思い、夫がいる遠い大和が見えるようになりたいという、個人的感情を歌っている。こうしたオモロからは、大和との競争心が多少感じられるが、琉歌の詠み手である妻は夫を中心に考えており、大和に対する気持ちは夫がそこに行っているの、夫を慕いつづける妻はただ単に大和を見たいという切ない気持ちを吐露しているだけである。そこには、大和に対する競争心や反感は一切感じられない。この琉歌から読み取れる感情はただ切ない思慕の情だけであり、もし大和に対して何らかの反感を持ったとしても、それは個人の気持ちに過ぎず、両国家間のレベルで考えられる感情までには及んでいない。

5. おわりに

調査の結果、大和のことを取り上げたオモロと琉歌の数は、ほぼ同数であることが判明した。ほとんどの歌で、「大和」という語が使われているが、オモロには「山城」と「日本内」、琉歌には「日の本」という単語も、それぞれ独自に見られた。今回、調査対象としたオモロと琉歌では、同じ「大和」という語を用いているが、そのイメージについては、違いのあることが明らかとなった。

まず、「大和」と「上て」を歌ったオモロからうかがえる「上下関係の中で上にある大和の高い評価」というイメージは、決してすべてのオモロの中で同じものとはなっていないことが分かった。オモロの場合は、大和に対する反感や競争意識の表現されたものも多く、大和のことを取り上げたオモロの中で、半数以上を占めていることが判明した。そうしたオモロを見ると、沖縄が誉められると同時に、大和と重ね合わせて歌われるパターンが目立つ。

一方、琉歌には、大和に対する反感の歌というのは1首しか見られず、その他に沖縄も大和もそれぞれ個別の歌でもって賛美されており、その数も4首ずつと同数であり、沖縄にも大和にも偏っていないことがわかった。また、残りの10首の琉歌は、単に航海の安全を喜ぶ様子や個人的な感情を歌っており、個人的な感情の描写という点は、主に琉球王国の国王、按司や神女を賛美する儀礼的歌謡のオモロには見られない抒情歌の琉歌の特徴である。

要するに、オモロは基本的にフォーマルな儀式の場で歌われ、群れの発想を表しているのに対し、琉歌はインフォーマルな民間の個人の間で歌われ、個人の発想を表現しているため、こうした結果になったのであろう。

また、オモロと琉歌の作成時代も考慮すれば、1609年に起こった薩摩藩の琉球入りの直後（1623年）に編纂された巻3～22のオモロには大和に対する反感の感情が表れるのも自然であろう。それに対し、1世紀ほど経った時代に作られた琉歌にはそのような気持ちはすでに非常に薄らいでいることが分かる。

結論としては、オモロの中に表れる大和のイメージは歴史的・政治的な背景から反感の歌が5首も現れたと推察することができる。しかし、琉歌の場

合は大和との歴史的・政治的な部分をほとんど持ち込まなかったもので、主に個人の感情や、安全な航海、無事に帰港する様子を表現した歌（D）が10首あるのに対して、反感の歌はわずか1首という結果になったのであろう。

【付記】

本稿は、「復帰40年沖縄国際シンポジウム」（2012年3月 早稲田大学）にて口頭発表した内容をもとにしたものである。

参考文献

- 池宮正治（1992）「万葉集と南島歌謡」『和歌文学講座2・万葉集Ⅰ』勉誠社、367－385頁
- 伊波普猷（1975）『伊波普猷全集 第九卷』平凡社、323－334頁
- 嘉手苅千鶴子（2003）『おもと琉歌の世界』森話社
- 嘉味田宗栄（1968）『琉球文学発想論』星印刷
- 嘉味田宗栄（1977）『琉球文学表現論』沖縄タイムス社
- 島袋盛敏、翁長俊郎（1995）『標音評釈琉歌全集』5版発行、武蔵野書院
- 清水彰（1984）『標音校注 琉歌全集総索引』武蔵野書院
- 清水彰（1994）『琉歌大成』（解説・索引編）沖縄タイムス社
- 仲原善忠、外間守善（1978）『おもろさうし 辞典・総索引・第2版』角川書店
- 比嘉実（1975）「琉歌の源流とその成立」『沖縄文化研究2』法政大学沖縄文化研究所、97－142頁
- 外間守善校注（2000）『おもろさうし 上・下』岩波文庫

別添資料 1 (オモロ)

① 祝い (賛美) の歌 → 計 12 首

① - ① 大和へ友好的な傾向を表す歌 → 6 首 (巻 8 - 457、巻 11 - 582、
620、巻 14 - 988、巻 15 - 1082、巻 21 - 1436)

月てだのやにてでかがちよわれが節 (巻 8 - 457) : 一 阿嘉のお祝付きや
 饒波のお祝付きや 此の拍子 揚げれ 又 下の世の主の 按司の又の按司の
 又 大和ゑむ 船頭 筑紫ゑむ 船頭

[大意]: 阿嘉のお祝付き、饒波のお祝付きは、お祈りをします。下の世の主が、
 按司の中の按司が、実に立派なことよ。大和、筑紫へも船頭たちを遣わして
 いることだ。このおもろ拍子を打ち揚げよ。

あおりやへが節 (巻 11 - 582) : 一 具志川の真玉内は げらへて 良く
 げらへて 勝りゆわる精高子 又 金福の真玉内は げらへて 又 唐の船 せ
 に 金 持ち寄せるぐすく 良く げらへて 又 大和船 せに 金 持ち
 寄せるぐすく

[大意]: 具志川の真玉内、金福の真玉内を造営して、唐の船、大和の船が、酒
 や財宝を持ち寄せるぐすくを見事に造り上げて、勝れ給う、霊力豊かなお方
 であることよ。

あおりやへが節 (巻 11 - 620) : 一 聞ゑ精の君ぎや 潮の花の 舞やいど
 見物 又 鳴響む精の君ぎや 又 大和ゑむ 船頭 又 精高子が
 まへ 前に 又 げらへ子が前に

[大意]: 名高く鳴り轟く精の君神女が、お祈りをします。大和へも船頭を遣わ
 して交易をし、精高子、げらへ子の前に財宝をもたらしたい。波の花のしぶ
 きの舞ぞ、見事である。

うおさけが節 (巻 14 - 988) : 一 あさてや 平良の 祭 はふとりか
 見せらば 見ちへ おわれ 又 三日は さにきやの 拝め 大和
 の子等に 見せたな やたる

[大意]: あさってのは平良の神祭りだ。はふとりが見せたら、見ていらっしやい。
 三日は、三箇の神拝みだ。大和の人たちに見せたいものだ。

あかのおゑつきねはのおゑつき月てだのやにてでかがちよわれが節 (巻 15 -
 1082) : 一 聞ゑ浦襲いに げらゑ鳴響み良し 真玉真物 成さい
 子思いと 撓て 又 鳴響む浦襲に 又 大和杉の板 金の縄 掛けて

[大意]: 名高く鳴り轟く浦襲で、立派な鳴響み良しを造って、真玉真物と父なる
 お方とが調和して栄え給うことよ。大和杉の板に見事な縄を掛けて、船を
 造ったのだ。

(巻 21 - 1436) : 一 聞ゑ精の君が 潮の花の 舞やいと 見物
 鳴響む精の君が 又 大和ゑむ 船頭 又 精高子が前に 又 げらへ
 子が前に

[大意]: 名高く鳴り轟く精の君神女が、お祈りをします。波の花のしぶきの舞
 ぞ見事である。大和へも船頭を遣わして交易をし、精高子、げらへ子神女の
 前に財宝をもたらしたいものだ。

①-⑧ 大和へ競争心を表す歌 → 6 首 (巻 7 - 377、巻 11 - 606、巻 14
 - 1018、巻 16 - 1144、巻 17 - 1185、巻 21 - 1426)

きこへ大きみぎやしよりもりはぢめが節 (巻 7 - 377) : 一 けとの沖縄が
 百浦まちらすわ 大和 京 鎌倉 報国寄せ按司襲い 按司襲い
 や 拝めばど 十百年 ちよわる 又 鳴響む沖縄が 又 下の世の

ぬし
主の

[大意]: 鳴り轟く沖縄神女が、お祈りをします。百浦まちらす神女は、大和の京、鎌倉に心を繋ぎ、果報南国をたくさん寄せることのできる国王様に尽くしている。国王様は拝めばぞ、千年も末長く榮えてましますことだ。国王様は、下の世の主が敬愛する立派な方だ。

こいしのがさしふとのばらが節 (巻 11 - 606): 一 かさすちやはら だ
りじゆ ^{とよ}鳴響め ^み見れば ^{みづ}水 ^{まわ}廻て 又 ^{まもん}真物ちやはら 又 なご
の浜に ^{はま}又 なごのひちやに 又 ^{やまと}大和ぎやめ だりじよ ^{とよ}鳴響め

[大意]: かさす若按司、立派な若按司は、げにこそ鳴り轟け。穏やかなごの浜に、なごの直地に、げにこそ鳴り轟け。大和までも、げにこそ鳴り轟け。若按司を見ると、水走のような美しい顔である。

(巻 14 - 1018): 一 ^{てどこん}手登根の大屋子 ^{やこ}唐の道 ^{たう}開けわちへ ^{みち}手登根す
^{にほんうち}日本内に ^{とよ}鳴響め 又 ^{てどこん}手登根の里主 ^{さとぬし}

[大意]: 手登根の大屋子が、手登根の里主が、中国と交易する道を開け給いて、手登根様こそ、日本中に鳴り轟き給うのだ。

あかのこがよくもまたもが節 (巻 16 - 1144): 一 ^{かつれん}勝連わ ^{なお}何にぎや ^{たと}譬
^{やまと}ゑる ^{かまくら}大和の ^{たと}鎌倉に ^{きむたか}譬ゑる 又 ^{なお}肝高わ ^{なほ}何にぎや

[大意]: 勝連は、肝高は、あまりに勝れていて何にか譬えようか。それこそ、大和の鎌倉に譬えるのだ。

きみがなし節 (巻 17 - 1185): 一 ^{ぎんかな}源河成り思ひや ^{よも}せち玉ぐすく
^{やまと}大和の ^{おに}ゑる かに ^{いぢへき}ある 又 ^{なよも}意地気成り思いや

[大意]：源河成り思い様は、勝れて活気のある成り思い様は、霊力豊かな美しいぐすくを造って栄えている。大和の勝れた人のようにぞ、勝れているのだ。

うちいちへはこゑしのがさしふとのばらが節（巻21 - 1426）： 一 かさす
 ちやは だりじよ 鳴響め 見れば 水廻て 又 真物ちやは
 は だりじよ 鳴響め 又 なごの浜に だりじよ 鳴響め 又
 なごのひちやに だりじよ 鳴響め 又 大和ぎやめ だりじよ 鳴
 響め

[大意]：かさす若按司、立派な若按司は、げにこそ鳴り轟いていることだ。穏やかななごの浜、なごの直地に、げにこそ鳴り轟いていることだ。大和までも、げにこそ鳴り轟いていることだ。若按司を見ると、水走のような美しい顔である。

② 反感の歌 → 5首（巻3 - 93、96、97、巻14 - 1027、巻20 - 1364）

しより大きみが節（巻3 - 93）： 一 聞得大君ぎや 鳴響む精高子が
 按司襲いしよ よ知れ 又 島討ち吉日 取りよわちへ 世添い吉日
 取りよわちへ 又 精軍せぢ 降ろちへ 又 百歳せぢ 降ろちへ
 又 げらへ大ころ達 按司襲い 又 肝が内や 真強く あれ 肝
 強く 真だに あれ 又 君々しよ 守れ 主主しよ 守れ 又
 大和島厳子 前坊主のくはら 又 肝が内は 迷わちへ 肝が内は
 迷わちへ 又 組む手 寄い倒ちへ あたす 寄い倒ちへ 又 沖膾
 しめて 辺端膾 しめて 又 大和島ぎやめむ 山城国ぎやめむ
 又 糸渡ちへ 掛けわれ 縄渡ちへ 掛けわれ （又）首里杜
 かなて 真玉杜 かなて 又 厳子 析られて くはら 誇られて
 又 聞得大君ぎや てるかはに 知られれ

[大意]：名高く霊力豊かな聞得大君が、お祈りをします。国王様こそ国を治め給え。島討ちの吉日、国を治めるための吉日を選び取り給いて、戦に勝つこ

とのできる靈力、長寿できる靈力を降ろして。撫でいつくしむ立派な男たちは、お心内は、げにこそ強くあれ。君々、主々神女こそ大ころたち、真ころたちを守れ。大和の薩摩の兵士たちの心内を迷わせて、両手両足を寄り倒して、冲膾、辺端膾にさせて、大和、山城までも、糸や縄を渡して支配し給え。首里杜、真玉杜はまさって、兵士たちは感謝し、祝福されて。聞得大君が太陽神にお祈りをします。国王様こそ国を治め給え。

かぐら節 (巻3-96): 一 聞得大君ぎや 大和 頼り 成ちへ 敵子
 嘆かすな 又 鳴響む精高子が 山城 衆生に 成ちへ 又 吾が
 掻い撫で按司襲い 精軍 立てわやり 又 吾が守る貴み子 精百
 立てわやり 又 あまみやから 沖縄 嶽てては 思はな 又 しね
 りやから 御島 杜てては 思はな 又 寄り上げ杜 居やり あよ
 なめさ 実に あて 又 金杜 居やり ことなめさ 撥ねて 又
 はから 引き立てて あわててよ しちやる 又 真境名よ 押し上げ
 て つかててよ しちやる 又 赤らせち 降るちへ 前坊主よ 迷
 わちへ 又 ひちゑるせち 降るちへ おが衆生よ ゆこちへ 又
 風の根も 取り直ちへ 久米の島 押し合わちへ 又 荒の根も 直ち
 へ 金の島 引き合わちへ 又 久米の君南風に 御言 遣りよわや
 り 又 金の島 のろのろ ぜるまは 祈て 又 てるかはが 押
 し合わし てるしのが 持ち成し

[大意]: 名高く靈力豊かな聞得大君がお祈りをして、大和を縁者にして、山城を臣下に行っている。兵士たちを嘆かすな。撫でいつくしみ守り給う国王様が、軍勢を出陣させ給いて、いざ迎え戦わん。遙かに遠いあまみや・しねりや時代からの沖縄なのだ。嶽、杜に守られている聖なる地だと思おうよ。寄り上げ杜、金杜にいて、心を並べ揃えて、神に感応して、兵士たちを励まし引き立て押し上げて、敵と戦おう、敵を突こうとしているのだ。立派で力ある靈力を乞い降ろして、大和兵、下賤な奴らを迷わせ欺いて、荒風も穏やかにして、久米島に船を向けて、久米島の君南風神女に御言を遣わし給いて、久米島の神女たちは火の神に祈って、太陽神が祈りを受け入れ、もてなしてくださる

ことのすばらしさよ。

(巻3-97): 一 地^ち天^と鳴^ぬ響^しむ大^{だい}主^{しゅ} に^にる^るや^やせ^せち^ち 知^しら^らた^たる せ^せち^ちや
遣^やり 大^{やまと}和^{しま}島^{ひち} 治^ちめ (又) 大^{だい}島^{しま}鳴^ぬ響^しむ若^{わか}主^{ぬし} か^かな^なや^やせ^せち^ち 知^しら^らた^たる
又 首^{しり}里^り杜^{もり} ち^ちよ^よわ^わる 英^{えい}祖^そに^にや^や末^{すへ}按^あ司^ぢ襲^{おそ}い 又 真^ま玉^{たま}杜^{もり} ち^ちよ^よわ^わ
る て^てだ^だが^が末^{すへ}按^あ司^ぢ襲^{おそ}い 又 精^{せい}軍^{ぐん} 立^たて^てら^ら数^{かず} 撃^うち^や遣^やり^りや^やり 鳴^と響^よめ
又 精^{せい}百^{ひや} 立^たて^てら^ら数^{かず} 島^{しま}踊^より 勝^{まさ}よ^よわ^われ 又 げ^げら^らへ^へ大^{だい}こ^ころ^ろ達^た
又 塵^{きりさへ}錆^{さへ}も (つ) 付^つけ^ける^るな 粉^{かうさび}錆^{さび}も 付^つけ^ける^るな 又 は^はは^はら 押^おし^し立^たて
早^{はや}濡^ぬ口^{くち}に 停^とめ^めれ 又 真^ま境^{さへ}名^なよ ぬ^ぬき^き上^あげ^げて あ^あう^うや^やか^かた^たも さ^さけ
又 気^け有^やる^る世^よ寄^よす^と富^み 押^おし^し浮^うけ^け数^{かず} 見^み守^まら 又 精^{せい}有^やる^る沖^{おきめづ}珍^づら 剗^く
り^う浮^かけ^け数^{かず} 見^み守^まら 又 大^{やまと}和^{まへ}前^{まへ}坊^ぼ主^{じや}の あ^あよ^よな^なめ^めの^い厳^こ子^し 又 山^や城^{しるまへ}前^{まへ}
坊^ぼ主^{じや}の こ^こと^とな^なめ^めの^{つぎや}お^おが^が衆^{しゅ}生^{せい} 又 精^{せい}軍^{ぐん}て^て 立^たて^てば 干^ひ瀬^せと 合^あわ
ち^ちへ つ^つい^い退^{たい}け 又 ゑ^えそ^そこ^こて^て 立^たて^てば に^にる^るや^や底^{そこ} つ^つい^い退^{たい}け 又
肝^かが^が内^{うち}に 思^{おも}わ^わば 肝^か垂^{しも}り^りよ し^しめ^めれ 又 肝^あが^が内^{うち}に 思^{おも}わ^わば 大^{だい}
地^ちに 落^おち^ちへ 捨^すて^てれ 又 天^{てん}が^が下^{くにかず} 国^{こく}数^{すう} 大^{だい}主^{しゅ}す よ^よ知^しら^らめ

[大意]:天地、国じゅうに鳴り轟く大主、若主は、ニルヤ・カナヤの霊力を持つて知られている。その霊力を遣わして大和島を平定せよ。首里杜、真玉杜にまします英祖の末裔、太陽神の末裔である国王様が、多くの軍勢を出陣させるごとに撃ちに撃って鳴り轟き、島踊りをして勝れ給え。将兵たちは心して刀の錆を付けるな。兵士を出発させ、軍勢差し上せて、船の通路口に停めよ。那覇港を塞げ。霊力豊かな世寄す富、沖珍らを浮かべるたびに見守ろう。大和兵ども、無礼なる兵士どもをこらしめよ。軍勢、軍船といって立てば、岩礁につつけ、海の底に退けてやつつけよ。侵入せんと心中に思ったら、敵の気力を失わせ、大地に落として捨てよ。天下、国じゅうを国王様こそ支配し給え。

(巻14-1027): 一 勢^{せい}理^り客^{かく}の^のろ^ろの^の あ^あけ^けし^しの^のろ^ろの^の 雨^{あま}く^くれ 降^お
ろ^ろち^ちへ 鎧^{よろい} 濡^ぬら^らち^ちへ 又 運^{うむてん}天^{てん} 着^つけ^けて 小^こ港^{みなと} 着^つけ^けて 又
嘉^か津^つ宇^{おう}嶽^{たけ} 下^さが^がる 雨^{あま}く^くれ 降^おろ^ろち^ちへ 鎧^{よろい} 濡^ぬら^らち^ちへ 又 大^{やまと}和^{まへ}の^の
軍^{いくさ} 山^{やしろ}城^{しろ}の^の 軍^{いくさ}

[大意]：勢理客ののろが、あけしの神女がお祈りをして、雨乞いをして雨を降らせて、鎧を濡らして困らせて、運天に、小港に着けて、嘉津宇嶺に下がる雨雲で雨を降らせて、鎧を濡らして困らせて、大和の、山城の軍勢を退けるのだ。

きせのしが節 (巻 20 - 1364)： 一 兼^{かねぐすく}城^{まふ}のろの 守^{おとまさ}りよわる弟^あ勝^とり や
ぐめさ 大和^{やまといくさ}軍^よ 寄せ^くせらや 又 国^{くに}かねののろの

[大意]：兼城のろ神女が、国かねののろ神女が守り給う勝れた弟者よ、恐れ多いことだ。大和軍が寄せたならば、弟者が退けてくれることであろう。

③「上て」の歌 → 3 首 (巻 10 - 538、巻 11 - 637、巻 21 - 1497)

ねいしまいしが節 (巻 10 - 538)： 一 伊敷^{いしけした}下^{よう} 世果^が報^{ほう} 寄^よせ着^つける
泊^{とまり} 又 愛^{かね}し金^{かね}殿^{どの}よ 又 石^{いし}へつは こので 又 金^{かな}へつは こので
又 伊敷^{いしけ} 寄^より直^{なお}ちへ 又 なたら 寄^より直^{なお}ちへ 又 楠^{くすぬき}は こ
ので 又 大和^{やまとふね}船^{のぼ} こので 又 大和^{やまとたび}旅^{のぼ} 上^{のぼ}て 又 山城^{やしろたび}旅^{のぼ} 上^{のぼ}て
又 珈^か婆^は羅^ら 買^かいに 上^{のぼ}て 又 手^て持^もち 買^かいに 上^{のぼ}て 又 思^{おも}い子^{ぐわ}
の 為^{ため}す 又 わり金^{かね}が 為^{ため}す

[大意]：伊敷の下の方の浜は、世果報を寄せて着ける泊である。勝れた金殿は立派な方である。石槌、金槌を作って、伊敷、なたら（傾斜地）を削り直して、楠船、大和船を作って、大和旅、山城旅に上って、勾玉、手持ち玉を買いに上って、思ひ子、わり金様のためにこそ上るのだ。

みるやにが節 (巻 11 - 637)： 一 し^なのくりや^{がみ}は 世^な馴^{がみ}れ神^なやれば や
れ このゑ 又 し^{やまとたび}のくりや^{のぼ}が 大和^{やまとたび}旅^{のぼ} 上^{のぼ}て やれ このゑ 又
神^{かみ}にしや^{やしろたび}が 山城^{やしろたび}旅^{のぼ} 上^{のぼ}て やれ このゑ 又 大和^{やまとたび}旅^{のぼ} 何^{なほ} 買^かい
が 上^{のぼ}て 又 山城^{やしろたび}旅^{のぼ} 何^{なほ} 買^かいが 上^{のぼ}て 又 青^{あお}しや上^{てう}玉^{たま} 買^かい
が 又 ふくしや上^{てう}つしや 買^かいが

[大意]:しのくりや神女は、世馴れ神であるから、しのくりや、神にしや神女が、大和旅、山城旅に上って、大和旅、山城旅は、何を買いに上ったのか、青色の勾玉、上等の勾玉を買に行っただの。

みるやにやが節 (巻 21 - 1497): 一 し^よのくりやは 世^よ馴^なれ神^{がみ}やれば
 やれ このゑ 又 し^よのくりやが 大^{やまと}和^{たび}旅^{のぼ} 上^へて やれ このへ
 又 神^{かみ}にしやが 山^{やしろ}城^{たび}旅^{のぼ} 上^へて やれ このゑ 又 大^{やまと}和^{たび}旅^{のぼ} 何^{なほ}
 買^かいぎや 上^{のぼ}てが やれ このゑ 又 山^{やしろ}城^{たび}旅^{のぼ} 何^{なほ} 買^かいが 上^{のぼ}て
 が やれ このゑ 又 青^{あお}しや上^{てう}玉^{たま} 買^かいが 上^{のぼ}て やれ このゑ
 又 ふくしや上^{てう}つしや 1 神^{かみ}やれば 又 みるや仁^に屋^や 意^い地^ぢ氣^き神^{かみ}
 やれば 又 みるや仁^に屋^や 大^{ぢやくにかみ}国^{こく}神^{かみ}やれば 又 行^いちゑ 切^きりやり
 金^{かね}若^{わか}子^こ 差^さしちよわちへ 又 行^いちへ 切^きりやり 金^{かね} 2 御^み愛^{かな}し若^{わか}
 い子^{きよ} 又 島^{しま}襲^{おそ}いに ちよわる 御^み愛^{かな}し若^{わか}い子^{きよ} 又 按^あ司^ぢ襲^{おそ}いが 思^{おも}
 い子^{ぐわ} 御^み愛^{かな}し若^{わか}い子^{きよ}]

[大意]:しのくりや神女は、世馴れ神であるから、やれ、このゑ。しのくりや神女が、神にしや神女が、大和旅、山城旅に上って、やれ、このゑ。大和旅、山城旅は、何を買いに上ったのか、やれ、このゑ。青色の曲玉、上等の曲玉を買に行っただ、やれ、このゑ。[] 内は混入。[1] 1488 の五行目に続く。[2] 1472 の四行目の次に続く。

④ 祈りの歌 → 1 首 (巻 13 - 783)

しよりゑとの節 (巻 13 - 783): 一 久^く米^めのこいしのが 百^{もも}浦^{うら}こいしの
 が 此^これど だ^{きや}にの 京^まの真^{かね}金 又 具^ぐ志^{しかわ}川^{とまり}の泊 果^か報^{ほう}寄^よる 又
 大^{やまと}和^ま真^{らせ}五^ど郎^し船^は頭^は 知^しられては 走^はりやたな

[大意]:久米島の、百浦のこいしの神女が手に入れた、これぞまことの立派な鉄であるよ。具志川の港に、幸運が寄る港に、大和の真五郎船頭様は神に守られて船を走らせよ。

別添資料2 (琉歌)

A 沖縄を賛美する歌 → 4首 (『琉歌全集』の2636番歌、『琉歌大成』の24・2178・4466番歌)

(『琉歌全集』・2636)： 日の本よまでも (フィヌムトゥ ヲ マディン) しほらし句立ちゆら (シュラシニエ イ タチュラ) 筆に咲く花の (フディニ サク ハナヌ) 色香染めて (イルカ スミティ) (読人しらず)

解説：沖縄の文学芸能の花 (= 筆に咲く花) は、日本までも素晴らしい色香が伝わって、評価されることであろう。

(『琉歌大成』・24)： あがとなのめらぬ (アガト ナヌミラス) 唐大和までも (カラ ヤマトウ マディン) 島影ようつす (シマカジユ ウツイス) 月の鏡 (ツイチヌ カガミ)

解説：あんなに遠く離れた唐大和までも見えるかと思うくらい、島影を映している月の鏡よ。

(『琉歌大成』・2178)： 自由なゆんやらば (ジユ ナユン ヤラバ) 大和から西洋 (ヤマトウカラ シイヨ) 舞ひめぐて浮名 (マイ ミグティ ウチナ) 立ててみほしや (タティティ ミブシャ)

解説：自分の思うようにできるのであれば、オトと大和。西洋と舞いめぐって、浮き名を立てたい。

(『琉歌大成』・4466)： 大和あんぐわたが (ヤマトウ アングワタヤ) 色香よりまさて (イルカユイ マサティ) 島のめやらべの (シマス ミヤラビス) なりきよらさ (シナリ ジュラサ)

解説：日本のねえさん達の色香よりも、島の女の子の方がぴったり合ってきれいだよ。

B 大和を賛美する歌 → 4首 (『琉歌全集』の1651・1709・2756番歌、『琉歌大成』の4467番歌)

(『琉歌全集』・1651)： かれよしよ歌て (カリユシユ ウタティ) わが会釈しゆもの (ワガ キシヤク シュムヌ) 早く着ちいもうれ (ハヤク チチイモリ)

大和錦 (ヤマトウ ニシチ) (作者：護得久朝置)

解説：めでたい歌を歌って、私が神様にお祈りしていますから、大和錦を着て早くお帰り下さい。(大和錦ということばにはいろいろな意味を含ましているようである。日本の政府に対する請願や陳情の成功も立派な錦であるし、そのほか日本文化や風習なども身につけることができれば、立派な錦と見ることが出来る。)

(『琉歌全集』・1709)：名に立ちゆる大和(ナニタチュル ヤマトウ) お上りや下り(ウヌブリヤ クダリ) おかれよしめしやいる(ウカリユシ ミシエル) お願しやべら(ウニゲ シャビラ) (作者：小祿按司朝恒)

解説：評判の高い大和にいらっしゃるときは、お上りもお下りもめでたく無事にお努めをおすましなさるようお願い致します。

(『琉歌全集』・2756)：官話大和口(カンワ ヤマトウグチ) 沖縄物語(ウチナ ムスガタイ)

一人話し話し(チュイ ハナシ バナシ) ぴりんぱらん(ピリン パラン) (作者：仲浜政模)

解説：中国語(北京語)、日本語、沖縄語を集まっている連中がぺらぺらしゃべっている。

(『琉歌大成』・4467)：大和から朝鮮(ヤマトウカラ チュシン) めぐて来やるかめや(ミグティ チャル カミヤ) 物言ひざましぎま(ムスイザマ シザマ) 人にかはて(フィトゥニ カワティ)

解説：日本から朝鮮とめぐって来たカメは、物の言い方も仕草も、他の人とは変わっているよ。

C 大和に対する反感の歌 → 1 首 (『琉歌全集』の1524 番歌)

(『琉歌全集』・1524)：沖縄秋山や(ウチナ アチャマヤ) 紅に染めて(クリナイニ スミティ) 大和吉村の(ヤマトウ ユシムラヌ) お茶の遊び(ウチャヌ アスイビ)

解説：沖縄は秋の山が紅葉して真っ赤になっているように、血に染まって苦しんでいるが、大和人の吉村という人はお茶の遊びをして楽しんでいる。

D 個人の感情、若しくは航海に関する歌 (大和に対する感情は歌わない) →

10 首（『琉歌全集』の 552・876・1183・1200・1637・1675・2104 番歌、『琉歌大成』の 1454・1630・2595 番歌）

（『琉歌全集』・552）： 那覇の親泊（ナファヌ ウェエドゥマイ）おしたてるはしら（ウシタティル ハシラ）大和山川に（ヤマトウ ヤマカワニ）ひけよはしら（フィキユ ハシラ）（作者：糸数里之子）

解説：那覇の大港から船を出すために、勢よく帆柱を押し立てた。これから大和の山川港に無事に船を引いて行ってくれよ、たのもしい帆柱だ。

（『琉歌全集』・876）： 今帰仁の城（ナチジンヌ グスイク）にやへ高さあれば（ニヤフェ タカサ アリバ）里前まゐる大和（サトゥメ メル ヤマトウ）見ゆらやすが（ミユラ ヤスイガ）

解説：今帰仁城がもっと高かったら、背の君のいらっしゃる大和も見えるであろうに、見えるのは海ばかり惜しいことだ。

（『琉歌全集』・1183）： いけば伊計離（イキバ イチハナリ）もどて浜平安座（ムドゥティ ハマ ヒヤンザ）平安座前の浜に（ヒヤンザ メヌ ハマニ）山原が着きをん（ヤンバラガ チチョン）山原やあらぬ（ヤンバラヤ アラス）大和もどり（ヤマトウ ムドゥイ）（読人しらず）

解説：行けば伊計離島、戻れば浜や平安座の島々、平安座島の前には山原船が着ておる。いやあれは山原船ではなくて、大和へ行って来た船だよ。

（『琉歌全集』・1200）： 寝てたらぬ浮名（ニティ タラス ウチナ）さびし夜の長さ（サビシ ユヌ ナガサ）幾度も大和（イクタビン ヤマトウ）しのぶ枕（シヌブ マクラ）（作者：二階堂彦太郎）

解説：旅先の女と一緒に寝ても、浮名を立てられるばかりで満足はできない。長い夜の寂しさ、心の中では幾度も大和に残して来た妻の手枕のことがしのばれる。（作者は薩摩から来た在番奉行であって、郷に入っては郷に従って琉歌をよくしたものに見える）。

（『琉歌全集』・1637）： お願ことすまち（ウニゲグトゥ スイマチ）旗ひかちいもうれ（ハタ フィカチ イモリ）大和□いらば（ヤマトウグチ イラバ）お迎しやべら（ウンケ シャビラ）（作者：護得久朝置）

解説：日本政府に請願のことを済まされたら、船に美しい旗をなびかせていらっしゃい。大和□（日本から来る船の入口）にお船が入ったら、お迎えし

ましよう。

(『琉歌全集』・1675)： 先見れば大和（サチ ミリバ ヤマトウ）後見れば沖縄（アトウ ミリバ ウチナ）これほどの御風（クリ フドウス ミカジ）こんどはじめ（クンドウ ハジミ）（読人しらず）

解説：先を見れば大和、後を見れば沖縄、これほどの素晴らしい順風は今年が初めてだ。（船が非常に速くて、今まで後方に沖縄が見えていたかと思うと、間もなく前方に大和が見えるようになったというわけで、それが即ち素晴らしい順風のおかげだ。）

(『琉歌全集』・2104)： 花の色きよらさ（ハナヌ イルジュラサ）もいこ花こ花（ムイクバナ クバナ）里前色きよらさ（サトウメ イルジュラサ）大和戻り（ヤマトウ ムドゥイ）（読人しらず）

解説：花の美しいのは茉莉の小さい花で、男の方のきれいなのは、大和の旅から帰られた方だ。

(『琉歌大成』・1454)： かれよしだう（カリユシド）かれよしだう（カリユシド）糸はへて大和（イトウ ハイティ ヤマトウ）行きやり来やり（うンジャイ チチャイ）

解説：大和への往復が糸を引くように真っ直ぐ早いもの、幸運の守りだ。

(『琉歌大成』・1630)： くちるがなくちて（クジルガナ クジティ）かけ歌よしちも（カキウタユ シチン）大和まるる里や（ヤマトウ メル サトウヤ）真肝だいもの（マジム デムヌ）

解説：皮肉を言えるだけ言い、歌で譬えても、大和へいらっしゃった旦那は本気なのだから。

(『琉歌大成』・2595)： 玉黄金里や（タマクガニ サトウヤ）大和かへいまうち（ヤマトウカイ イモチ）霰降る夜半や（アラリ フル ユワヤ）夢や見だね（イミヤ ンダニ）

解説：大事な方は日本へいらっしゃったが、霰の降る夜半には私の夢をご覧になりませんか。

<ABSTRACT>

The image of *Yamato* (ancient Japan) in *omoro* and *ryūka*

Jana URBANOVÁ

“*Omorosaushi*” - a collection of Okinawan epic songs called *omoro* was compiled between 1531 and 1623 by the government of the Ryukyu Kingdom. The origins of the Okinawan lyric song *ryūka* are unknown, however the latest written record dates back to the end of the 17th century and it is believed that *ryūka* was widely composed from the 18th century. The research has been introduced claiming the mutual relationship between the two above-mentioned song types.

In this paper, I explored the image of *Yamato* (ancient Japan) in *omoro* and *ryūka* by doing a comparative study into the expression *Yamato* (and related expressions *Yashiro*, *Nihon'uchi* and *Hinomoto* – all of them having the same meaning as *Yamato*) comprised in both song types. I found out that the number of both song types containing expressions that mean *Yamato* is almost the same (21 *omoro* songs and 19 *ryūka* songs). However, even though both types of songs use the same expression *Yamato*, there are several differences regarding the image of *Yamato* in each of the two song types.

Regarding *omoro* songs, even though there are 3 songs containing the expression *nobote* together with the expression *Yamato* implying the high status of *Yamato*, the positive image of *Yamato* is not seen in all of the *omoro* songs. On the contrary - more than half of the *omoro* songs (11 songs) express either hostility or rivalry towards *Yamato*. Furthermore, in those *omoro* that praise Okinawa there is frequently presented comparison to *Yamato* as well which implies strong competitive feelings.

On the other hand, in *ryūka* songs there is only 1 song that expresses hostility towards *Yamato*. Apart from that there are songs praising either

Okinawa or *Yamato*, and the number of songs in each of these two groups is the same (4 songs). The rest of the *ryūka* (10 songs) depicts personal feelings – a feature not seen in *omoro*, and thus typical to *ryūka* – or celebrates safe journey on the sea.

The fact, that *omoro* was mostly sung in the formal environment during festivals and served as a song expressing “collective way of thinking”, whereas *ryūka* was widely created among peasants during their daily lives and expresses “individual way of thinking and personal feelings”, as well as the different period in which the both song types originated fairly contributed to the different image of *Yamato* in both song types.

In conclusion, the image of *Yamato* in epic songs *omoro* was strongly influenced by the historical and political background resulting in 5 songs expressing hostility towards *Yamato* and 6 more songs expressing rivalry. On the other hand, since lyric song *ryūka* comprised very little political opinions, the largest number of songs containing the expression *Yamato* deals with personal feelings or safe journey, whereas only 1 song expresses hostility towards *Yamato*.